
アリス in ワンダーランド

蓮華永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリス in ワンダーランド

【Nコード】

N0161Q

【作者名】

蓮華永

【あらすじ】

昼寝をしていたアリスの目の前に男が現れた。其の男に「お前はアリスか？」と、聞かれ「そうよ」と、答えてしまった。

それが、アリスの悲劇の始まりだった。

いきなり男に担がれ、穴に落とされたアリスが行きついた場所は、「ワンダーランド」と云われる場所だった。

そこでは愉快な人（？）達が待っていた。

エピソード1

木陰に座って、うとうとと睡魔すごまに襲われる。木の葉から差す日の光が心地よい。

寝ようと思ったら、

「おい」

声が聞こえた。だけど、眠過ぎて、眼を開けることも億劫おっくうになつて、私は無視した。

「おい、聞こえないのか・・・はぁ・・・」

諦めたかな？ そう思ったら、バシンと音がして、その次にバキバキと音がした。ただ事ではないと思って眼を開けると、白髪紅眼の男が立っていた。其の横に木が倒れているけど、気にしない。

「お前はアリスか？」

いきなり質問をされた。私は反射的にそれに答えてしまった。

「ええ、私はアリスよ・・・それがどうしたの？」

私は答えて、聞いた。そすると、男は口角を上げて、笑った。そして、視界から消えたと思ったら、身体がふわりと浮いた。

「・・・へ・・・？」

「さて、さっさと行くぞ」

「・・・何処に？」

「意外と冷静だな・・・」

男は其のまま走り出した。

風が少し吹いて心地がいい。眠くなってきた……。あ、
眼が閉じそう……。○

「寝る暇なんて、無いぞ」

男がそう云ったと同時に、さつきとは違う感じに身体が浮いた。

・ 違う、落ちていた。

「っ・・・なんで、落ちてんのよおおおおおおおおお
!？」

私は叫んだ。だけど、状況が変わる訳じゃ無かった……。

ドサツ。思いつきり尻もちをつき、やっと着地が出来た。取り敢えずお尻が痛い・・・。

目線をあげると、知らない光景が広がっていた。

「ようこそ、ワンダーランドへ。『第87代アリス』を歓迎いたす」
「……………第87代……………」

何のよ、これは・・・・・。

私は意味の判らない所に来てしまった様です――。

エピソード1（後書き）

「紅髪のアリス」のリメイク版です。

話は結構変わりますが、キャラは基本的に変わりません。
少しキャラが増えたぐらいでしょうか？

エピソード2

「自己紹介が遅れたな。俺の名は白兎^{ハクト}だ。覚えておけ」

「ハクト………。漢字でなんて書くの……？」

「白い兎だ……」

「ある意味恰好いいけど、ある意味恰好悪いわね………」

私が云うと、白兎は苦虫を数匹噛み潰したような顔をした。凶星かしら？

「「ロンドン橋が落ちまする 落ちまする 落ちまする ロンドン橋が落ちまする 聖母様聖母様」」

「……？ マザーグース………。何処から……」。

「「あ、アリスだ！」」

「わ！？ ……双子？ って何で私の名前を知ってるの………。
・？」

藍色の髪の瓜二つの男の子達。唯一違うのは瞳の色位かしら？

「「初めまして！」」

「僕はトウイードルダムの水連^{スイレン}。よろしく！」

「僕はトウイードルデイの水蘭^{スイラン}。よろしくね」

難しい名前をいともたやたすく云った此の子たち。私は何年経っても云えない気がする。

「「ロンドンブリッジフォーリンダウン フォーリンダウンフォーリンダウン ロンドンブリッジフォーリンダウン マイフェアレディ」」

「それ、マザーグースよね？」

「「そうだよ」」

「僕達はこの歌が好き。他にも『ハンプティ・ダンプティ』とか！」

「うんうん、大好き！ 後、『お母さんがわたしを殺した』とか！ 無邪気にそう答える二人。『お母さんがわたしを殺した』と、云うのは、親の云う事を聞いて、おとなしくしてないと駄目って云う、歌。少し歌詞が怖いよね・・・』」

「『ハンプティ・ダンプティ堀の上 ハンプティ・ダンプティ落つ こちた みんながどんなに騒いでも もう元へは戻らない』」

「マザーグース、懐かしい・・・。よく姉さんと歌ってたっけ・・・」

「ロンドンブリッジフォーリンダウン フォーリンダウン フォーリンダウン ロンドンブリッジフォーリンダウン マイフェアデイ・・・」

口ずさむ。懐かしさを含んで。帰りたい、あの場所に・・・。

「「・・・アリス、其の歌の続き・・・何か知ってる？」」

「へ？ 知らないわ。知ってるの？」

「「うん。歌ってあげる」」

人柱をささげましょう ささげましょう ささげましょう 人柱をささげましょう 聖母様、聖母様

何で作り直そうか 直そうか 直そうか 何で作り直そうか 聖母様 聖母様

金と銀とで作ろうか 作ろうか 作ろうか 金と銀とで作ろうか 聖母様 聖母様

金と銀では盗まれる 盗まれる 盗まれる 金と銀では盗まれる

聖母様 聖母様

針とピンとで作りまする 作りまする 作りまする 針とピンと
で作りまする 聖母様 聖母様

針とピンでは折れまする 折れまする 折れまする 針とピンで
は折れまする 聖母様 聖母様

土と粘土で作ろうか 作ろうか 作ろうか 土と粘土で作ろうか
聖母様 聖母様

土と粘土じゃ流される 流される 流される 土と粘土じゃ流さ
れる 聖母様 聖母様

丈夫な石で作ろうか 作ろうか 作ろうか 丈夫な石で作ろうか
聖母様 聖母様

それなら長持ちするでしょう するでしょう するでしょう そ
れなら長持ちするでしょう 聖母様 聖母様

「人柱って・・・・・・・・」

「くす・・・・」

「怖いでしょ？」

「人柱だって！」

「人柱が出てくるのは僕達も判らないんだ！」

終始無邪気な此の子たちは、楽しそうに歌っているので、私も一
緒に歌うことにした。

「「アリスは歌が上手だね。一緒に歌っていて心地いいよ！」
「そう云ってもらえると、私も嬉しいわ」
私は笑って水連と水蘭の頭を交互に撫でた。

エピソード2（後書き）

マザーグースがよく判らない人は「ヤフー」などで御調べ下さい。

エピソード3

トウィードルダムとトウィードルデイが大喧嘩を始めたわけは

トウィードルデイがトウィードルダムのおもちゃをこわしたから
だといいます

そこへ酒樽のようにまるまると太った大きなカラスがやってきま
した

二人はそれこそびっくり仰天喧嘩などしてる場合じゃありません

ふと、其の歌が聞こえた。其の声がするほうに行ってみると、黒
髪の人男の人が居た。私は其の人を見てみると、男の人がこちらに気
付いた様で、私の方を見た。すると、大一輪の薔薇の様な笑顔で私
を見た。

「アリスじゃないか・・・！ 俺に逢いに来てくれたのかい・・・
・・・？」

「え、と・・・あの、済みません・・・貴方、誰・・・でしょうか・
・・・？」

「俺？ ああ、そう云えば、教えていなかったね。俺はラゼリオン。
よろしく」

「ラゼリオン・・・さん？」
云いつつ小首を傾げる。

「『さん』付けは止めて。呼び捨てでいい。というか、呼び捨てに

して」

「・・・ラゼリ、オン・・・・・・・・・・？」

「そう。何？ アリス」

「いえ、確かめただけです・・・・・・・・・・」

そう云うと、あからさまにラゼリオンは項垂れた。

「・・・・・・・・・・餓鬼・・・・・・・・・・ですか？ 貴方は・・・・・・・・・・」

物凄い素直な言葉が無意識のうちにでてしまいました。

ラゼリオンは肩を震わせ、顔を上げたと思ったら、泣いていました。此の人外見的には私より年上だよね！？

「アリスの馬鹿なあ——————ッ！！！！！」

ラゼリオンは其のまま走り去って行きました。・・・餓鬼確定。

エピソード3（後書き）

楽しいです。ラゼリオンは二枚目なくせに性格が残念なんです。

エピソード4

朝が来た。ゆっくりと起き、ベッドから下りる。髪を梳き、服を着替える。

「今日は・・・赤の女王を王様と白の女王に逢いに行くんだっけ・・・」

先日白兔が云っていたっけ？ 面倒くさいな・・・。

森を抜けると、紅色の城と白色の城が隣り合わせに並んでいる。

「ほら、あそこに居る。・・・襲われんなよ？」

「はい・・・？ どういう意味？」

聞き返したけど白兔は手を振り、行つて来いと言外に云っている。

「おや、君がアリス？ 可愛いね・・・」

「可愛い、可愛い！ 私、貴女の事を気に入ったわ！」

金髪の子と女の子が居た。その隣には・・・

「あれ？ ラゼリオン？」

「アリスじゃないか！！ また会えた！！」

黒髪翡翠の整った顔立ち。二枚目で性格残念なラゼリオンが其処に居た。

「・・・ラゼリオン？ 君、アリスに馴れ馴れしいね・・・」

「馴れ馴れしいわ。今すぐ死になさい、白の女王」
「酷いなあ・・・」

ラゼリオンと二人の美少女と美少年は私を置いて話し始めた。ふと、ある単語に疑問を抱いて、首を傾げる。

「・・・『白の女王』・・・？」

「うん？ そうだよ、俺が白の女王だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・男、よね・・・・・・・・？」

「うん？　そうだけど、俺が白の女王だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・気持ち悪い・・・・・・・・」

「酷い、今のが一番傷ついた」

私は気持ち悪い者を見るような眼でラゼリオンを見た。

「あのね、そんなこと云ったら、あの二人だってそうだよ！」

ラゼリオンは憤り、少年少女に指をさす。それを合図に二人は自己紹介を始めた。

「初めまして、僕はヴィンセント。赤の女王と呼ばれている」

「初めまして、私はナターリア。赤の王様と呼ばれてるわ」

「二人は可愛いから赦すわ」

「差別だ！　人種差別だあ！！」

ラゼリオンはそう叫んで、テーブルに突っ伏した。私ははあと溜息をつき、二人に云う。

「私、此の人が餓鬼に思えて仕方ないわ・・・・・・・・」

「「同感」」

「苛めだあ――――ッ！！！！」

ラゼリオンの叫び声が、森を駆け抜けた。

エピソード4（後書き）

コメディは楽しいなあ・・・。

エピソード5

「……私は、何で此処に来たんだろう……？」

「ねえ、ヴィンス、何で私は此処に居るの……？」

「唐突だな。まあ、答えは簡単。お前が居なきゃ僕達の『刻』が進まないからだ」

「……『刻』……？」

首を傾げ、ヴィンスの綺麗な横顔を見る。

「そう、『刻』だ……。君が居なくても、それなりの時間が紡がれる。だけど、ちゃんとした時間は君が居なきゃ進まない……」

「私が、居なきゃ……。時間が進まない……？」

ヴィンスがゆっくり眼を閉じる。一つ一つ、言葉が紡がれる。

「此処、『ワンダーランド』は、アリスを中心に出来ている。だから、此処は君が必要になる。其のアリスの面倒をみるのが……。白ウサギの役目なんだが……。ある日、あいつは理を犯した」

「理？」

ヴィンスが眼を開け、私を見る。碧色の瞳、今にも吸い込まれそうだ……。

「君を……。第83代アリスを殺した」

私は眼を見開いた。瞳が揺れる。

「否、正確には自殺に追い込んだと云うべきか？ あいつは彼女を束縛し過ぎた。おかげで彼女は耐え切れず、自殺していった」

言葉を紡ぐごとに、ヴィンスの顔が陰しくなる。

「そして、元々あった浅い溝が、余計深くなった。あいつは皆の嫉妬の的だったからな……」

そんな、風には見えない。何時も白兔を見ているが、そんな過去があった様には見えない。何時も、微笑んでくれていたから……

「……君はまさか、彼の事を好きになったとか、云わないだろうね……?」

「えっ!? な、何を唐突に……!」

私はヴィンスを勢いよく振り返った。ヴィンスも私を凝視している。

「い・わ・な・い、だろーねえー?」

「い・わ・な・い、わぁーよぉー!」

そう云った後、私とヴィンスは笑った。

少し、図星をつかれた。本当は……。

エピソード6

部屋に入ると、眠り鼠の智鶴さんと帽子屋の茅さんと赤の騎士の嘉瑞と遊猫のクリスが居た。

「……皆さん、不法侵入ですよ……」

「「「暇なんだ（もん・よ）」」」

「確か、ナタリーに貰ったライフルがあつたはず……」

「「「なんてもん貰ってん（の・だ）ッ！！！！」」」

皆が全力でとめてくるから、私は渋々椅子に座った。

「ね、アリス。お菓子持って来たんだけど、食べる？」

智鶴さんが持参したケーキ。人数分あって、チョコケーキにショートケーキ、ミルフィーユにフルーツタルト、バームクーヘンにガレット。其の中から各々好きなものをとる。私はチョコレートケーキだ。

「ん、美味しい……」

「いいね、其の顔。快感に溺れた者の顔の様だ」

「死んでください、智鶴さん」

「それは酷過ぎるよ、アリス」

智鶴さんは苦笑いをして、紅茶を飲む。こういう仕草は上品だなんて思うけど、普段がなー……。

「アリス、ケーキちよつと分けて。僕のもあげる」

「ん？ 別にお返しはいらないわ。はい、あげる」

私がケーキを差し出すと、嘉瑞はパアアつと顔を明るくさせた。

「有難う、アリス！ じゃ、お言葉に甘えてもらうね」

嘉瑞はケーキを口に入れると、とてつもなく、可愛い顔をした。私は其の顔を微笑みながら見ていた。過保護な親の様な心境だ。

「そうだ、アリス・・・一つ聞いてもいい？」

唐突にクリスが声をかけてきた。

「ん？ 何・・・、クリス」

クリスに向き直ると、クリスは今まで見たことが無い程の真剣な顔をしていた。

「・・・・・・・・？」

「アリス、お前・・・白ウサギに逢っているか？」

クリスがそう云うと、私以外の皆が肩を震わせる。

「白ウサギって・・・白兎の事？ 逢ってるけど・・・・・・・・それが、どうしたの？」

もしかしてと思い、私はクリスを睨む。

「確か、赤の女王に白兎の過去の事を聞いたんだよね？ アリス、それを判っていて、あいつと逢っているのか？」

次に智鶴さんが云う。皆して、顔が怖い・・・・・・・・。

「聞いたわ。だけど、過去の事と、今の私は関係無い」
アリス

私がそう云うと、皆して眼を見開いた。そして、智鶴さんが噴き出す。

「っはは！ アリスらしいや！ そうだね、過去のアリスと君は関係無いね・・・・・・・・」

智鶴さんの言葉に、私はちよつと安堵した。

今の、自分の発言に・・・・・・・・自信が持てなかったから・・・・・・・・

エピソード6（後書き）

アリスはもう少ししたら終わる。
多分・・・。。。

エピソード7

私は、何で彼の傍に居たいと、思うんだろう？

——「あいつ白ウサギはむかし過去の君を殺した……」

それが、何だって云うの？ それは、私に関係ないでしょ!？

そう、云っているのに、皆は理解してくれない。

「白兔……」

貴方を、望む——。

貴方を、欲ほっす——。

「貴方は……」

私の事を、好きでいてくれる？

貴方は、私を愛しているの？

「白兔……、白兔」

私は、貴方に愛されていないと、満たされない――――。

「欲求不満、ね．．．．．私は」

私は溜息をつき、浴室へと足を伸ばした。

ポチャン

白い入浴剤。真っ白だから、裸でも他からは見えない。

「白い．．．．．白兔みたい．．．．．」

此処最近、白いものの全てが白兔に見えてくる。

「物凄く溺愛しちゃったみたい．．．．．」

私は浅く笑い、手で水面を叩いた。

「アリス、風呂に入っていたのか」

声が、した。それはよく聞く声で．．．．．

「白兔！？　な、何で居るのッ！？」

「お前に逢いたかったから。にしても、白い入浴剤か．．．．．
見えないじゃないか」

白兔の発言に私は桶おけを持ち、投げた。

「見なくて結構！！！！」

ガゴウッ！

云い音がしたわ。見事白兔の顔面にクリーンヒットした。

「痛いぞ、アリス・・・」

「貴方がセクハラ発言するからよ！」

素直じゃ、ない、私は・・・・・・・・。

•
だけど、きちんと、この気持ちだけは、素直に伝えたい・・・・・・・・

貴方へと――――。

エピソード7（後書き）

アリスは清々しい性格してますね。

エピソード8

「アリス、こんにちわ」

「あ、三兎^{ミット}！　こんにちわ」

碧髪金眼の三月ウサギの三兎。ほんわかとしていて、唯一私にラブコールを送ってこない住人なの。だから、白兎の次に安心できる人なの。

「アリス、チョコケーキ、要る？」

「あ！　くれるの！？　ありがとう！」

私が嬉しそうな顔すると、三兎は安心したように、ほっと安堵した。

「よかった、喜んでもらえて。今、食べて。アリスの食べてるところ、見ていたい」

「ほへ？　今、此处で？」

私が首を傾げ、聞くと、三兎はうんと、ニッコリ笑って云った。

「うん、お願い」

「うー……」

少し思案し、三兎を見る。三兎は相変わらずニコニコと笑っている。

「判った、貰っちゃったし……」

少し紅潮させながら、頷くと、三兎はさっきより顔を明るくさせた。

ああ、そんなかおしないでよお……！

美味しく頂きました。

私が食べてる間、三兎はニコニコと私の食べてる姿を見ていた。恥ずかしい……。

「……楽、しかった……？　私を凝視してるの……」

「うん、楽しかった！ アリスは可愛いから！」
「うー・・・・・・・・」

確かに、三兎は、ラブコールはしてこない。だけど、「可愛い」等の言葉は、躊躇無く云う。

其処が困りもの、だったりする・・・・・・・・。私のオアシスは何処へ・・・・・・・・？

「じゃ、アリス、またね！」

「うん、ケーキ有難う！ またねー」

お互いに手を振り合う。と、去ろうとしていた三兎がこちらを振り返った。

「ねえ、アリス・・・」

「うん？ 何？」

「白兎の事・・・、好きに、なっちゃ駄目だよ？ なったら、あいづが・・・・・・・・」

一旦区切り、三兎は私を睨む。

「殺されるよ？」

「・・・・・・・・ツー！？」

私は眼を見開く。三兎はニコツと笑い、踵を返した。

・・・・どういう、意味よ・・・・・・・・。

エピソード9

——「好きになったらあいつが、殺されるよ？」

どう云う意味か、判らない。

だから・・・・・・・・

相談してみた。

「あー、三兎にそう云われたんだー……。成程、だから、此処最近三兎の機嫌がいいのか・・・・・・・・」

「智鶴さん。何か判ります？」

智鶴さんは陽気に微笑んで、答えた。

「彼は白ウサギの『監視』役なんだよ。」

「監視・・・役？」

私がオウム返しをすると、智鶴さんは説明してくれた。

「彼は赤の女王に頼まれて。白ウサギの監視をしてるんだ。もし、彼がまた理を犯したら、彼が密かに所持しているマシンガンで・・・撃ち殺すんだって！」

「何で持ってるんですか!？」

「君だって、赤の王様に貰ってるんじゃない」

「・・・・・・・・」

「それに、水連と水蘭だって、槍とマシンガン持ってるよ？」

「うっそーッ!？」

「ホント」

あんな小さい子が・・・持ってるなんて・・・！！

「それと、あの子たち、時たま身体が大きくなったり、小さくなったりするんだよ。服の構造が不思議・・・」

「不思議過ぎ・・・」

あれ？ さっきまでのシリアスは何処に行ったのかしら・・・
・？

エピソード9 (後書き)

本当に・・・。

エピソード10

「アリスじゃないか、久しぶりだな」

声がしたので、その方向に顔を向けると、赤の騎士ジャツクである恢焰カイエンさんが居た。

「恢焰さん。珍しいですね、ヴィンスとナタリーの傍に居ないなんて……」

「お使いを、頼まれたんです。嘉瑞が何処かへと消えたので、代わりに俺が行くことになった」

「……多分、クリスと一緒に居ると思う……」

「ああ、それは俺も思った事だ」

恢焰さんは苦笑いし、私の頭をぽんぽんと撫でる。

「気易く、俺のアリスに触れないでくれないか？」

白い髪が視界を覆った。それは白兎だった。

「白、ウサギ……。……何時、アリスが白ウサギのモノになったんだ？」

恢焰さんは不思議そうに小首を傾げた。白兎はその仕草にがっかりと項垂れ、恢焰さんの手を離れた。

「アリス、此処じゃ、邪魔が入る。何処か、静かな所へ行こう」

「え、ええ……」

どうしよう。白兎と手を繋いじゃったよ……

どうか、此の胸の高鳴りが、手を伝って、白兎に届きませんように……！

白兔に付いて行くと、見晴らしのいい、高台に着いた。

「わぁ……ワンダーランドが一望出来る……！」

「此処は、俺が気に入っているとこで、此の高台は俺が建てたんだ。だから、他の奴らは入ってこれない」

つまり、秘密基地みたいなもの？

と、聞いたたら、白兔は吹き出して、大笑いした。

「あ、ははは！ お前のボキャブラリーに貧困さに、言葉も……出ないよ……！」

「しっつれいね！ もうっ」

私が頬を膨らませ、歩き出そうとしたら、白兔が後ろから抱き締めてきた。

「こんな、日々が……ずっと、ずっと続けば、いいのにな……」

その言葉に、私は肩を震わせた。

判っていた事だ。

私が居なければ、此の国の『刻』は進まない。
アリス ワンダーランド

だけど、ずっと、此処にとどまる訳では、無い。

何時かは、元の世界に……戻るときが、来る。

そうすれば、こんな風に、皆と戯れる事何て、出来なくなる。

私は、静かに涙を流した。

エピソード10（後書き）

出したかったキャラをすべて出し切った・・・！

エピソード11

貴方共に、生きて行きたい。

だけど、それは、叶わない夢^{もの}。

だから、決して云わない。

望まない――――。

風が、吹く。心地の良い、香りを乗せて。

―――後、一週間。

一週間で、私は此処を去る。

今私が居るのは、此の前白兔が教えてくれた展望台。

「眺め^{これ}を見れるのも、後少しだけか・・・・・・」
淡く笑っているつもりでも、瞳からぼろぼろと涙が零れる。

「ふ、う・・・・・・ん」

白兔、白兔、白兔・・・・・・。

其の名を唱えれば唱える程に、愛おしくなり、苦しくなる。
全てを捨ててでも、貴方を選びたい。

だけど、ずっと此処にとどまると云うことは、私の身体が壊れる
と云う事。私が死ぬと云う事。

ワ^{此処}ンダーランドには一度しか来れない。

もう、二度と来れない。

「白……兎お……！！」

貴方と、離れるのが、怖い。厭だ。

こんなにも、貴方を愛してしまうなんて……。

白兎———。

エピソード12

後、三日。

刻一刻と、此処を去る日が近づいてくる。

伝えよう。

たとえ、断られても。

伝えよう、此の気持ちには。

私は決心し、白兎の家に行く。
ノックをしようと、手を伸ばす。だけど、上手く手が動かない。
手が、小刻みに震える。

「アリス・・・ッ！」

「ッ・・・」

ノックをする前に、扉が開き、白兎が私を抱きしめる。

「白、兎・・・・・・・・・・！」

「アリス、アリス・・・！」

白兎は抑えが効かない様で、私の名前を呼ぶとともに腕の力が強くなっていく。

「白兎、痛いわ。離して。それと、話が有るの」

「・・・話？ 判った、入って」

私が云うと、白兎は私を離して、入るように促してきた。

「お、お邪魔します……」

律義に云うと、白兎は眼を瞠り、クスッと微笑んだ。

「どうぞ、姫君」

その言葉が、私に……私の心を決めるのよ。

白兎の家はよく来る。男にしては綺麗に整頓してある。

ただし、何処ぞの納戸なんどに押し込んであるだけだけ。

「それで、話って？」

こう、云う様に促されると、物凄く緊張する。

「後、三日……」

其の言葉を、云う。白兎はそれに反応した。

「私は、帰らなきゃいけない。だけど、帰りたく無い。それはね、大切な……好きな人が出来たから」

「……好きな、人……!？」

「そう、其の人は、皆に嫌われている。だけど、本当は心優しく、とても、綺麗な笑顔を持ってる」

「……それって」

「白兎、私は貴方を愛しているの。帰りたく、無いよお……!」

最後は涙が滲む。白兎は驚いた様な顔をして、微笑んだ。

「俺も、好きだ。アリス、ただお前だけを愛している」

そう云って、白兎は私を抱き寄せた。

此の、ぬくもりを信じていいですか？

すぐに、離れてしまうぬくもりを、今は信じていいですか？

私の愛しい人———。

エピソード13

それから、私達は毎日逢っていた。

まるで、別れを惜しむかのように。

だけど………

「今日、だな……」

白兔が云う。

今日、私は元の世界^{あっち}に帰る。

「そう、ね………」

ぎゅっと、抱き締める力を強める。だけど、すぐに力を弱めて、私は白兔から離れる。

「さよなら………私の愛しい男^{ひと}。もう、逢うことは無いのでしょうけど、私は貴方を忘れない」

そう、云い残し。私は白兔の家を出た。

目指す場所は、赤の城。アリスを元の世界^{あっち}に送り返せるのは赤の女王を白の女王だけ。

「ヴェィンス、ラゼリオン。来たわ」

声を掛ければ二人が出てくる。

「待っていたぞ、こっちだ。アリス」
おとなしく私は付いて行く。

刻一刻と、私の時間は過ぎて行く。

それは、私にとっては有意義なものだった。

彼に、出逢えて、よかった。

「アリス・・・ッ!!」

其の時、聞きなれた声が聞こえた。

「白、兎・・・・・・・・？　なん、で・・・」

白兎は肩で息をし、ゆっくりと私に近付いてきた。そして私を力強く抱きしめた。

「俺を、おいて行くな・・・俺も、一緒に行く」

「それは無理だ」

ラゼリオンが云う。其の後、続けてヴィンスが云う。

「我々は此処でしか生きられない。あっちに行ったらすぐに灰と化す。やめておけ。お前の“代わり”を探すのは面倒なんだ」

吐き捨てるかのような、云い方だった。

「白兎、お願い。私は貴方に逢えなくても、貴方が生きていると云う事が・・・それだけで、いいのよ」

「アリス・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」

白兎は私の名前を云った後、少し涙を流し始めた。

「アリス、また、何時か逢おう。また、何時か・・・・・・・・・・」

そう云って、白兎は私から離れる。それと同時に、私は足から消え始める。

「白兎……好きよ、何時までも、ずっと……貴方だけを、愛し続けるわ……」

そして、視界が真っ白になった。

ザア……

風が流れる音が聞こえる。ゆっくりと、眼を開ける。其処には、見慣れた木陰があった。

「私……何、してたんだろ……。長い、長い……。夢を見て居た様な……」

そう、思ったけど、思い出せない。そして、また眠気が襲ってくる。

これは、長い長い夢のお話。

短いけど、長い、愛しい思い出キオク。

これを、思い出すことは、もう、無い。

だけど、心の何処かで、貴方を覚えています。

白兔

もう、私は貴方の名を紡ぐことは無い。

だけど、貴方を愛している。

それは変わらない。

ずっと、ずっと変わらないモノ————。

白兔、白兔・・・愛して、います。

白兔————

f
i
n

あとがき

これにて、「アリス in ワンダーランド」は終わりです。

これは前に書いていたものをリメイクしたもので、友人に「また書いて」とお願いされたので、書いたのですが……

人氣が、無かった……（泣）。

それでも、いいんですが。でも、自分の作品が人氣無いというのは、つらいものですよね。ああ……

とりあえず、私は初めて作品を終わらせれたことに、感激しております。

これが終わったため、当分は新作はやりませんが、下手したら「神楽家三人兄弟」がそろそろ終わるかも知れないので、何か新作を投稿するかもしれません。

それも、人氣無かったら、どうしよう……（汗）。

それでも根気よく、やって行きたいと思います。

読んで下さった読者サマには感謝しております。

これまで有難う御座いました。

2011年 3月 9日

雑賀 蜜屡

拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161q/>

アリス in ワンダーランド

2011年3月26日17時39分発行